

日田人 同じ空の下

○橋劇団 三代目座長 ○31歳 ○有田小学校 出身

VOL.41 UNDER THE SAME SKY
PHOTOGRAPHY BY GOTARO ISHII & YU ANAI
TEXT BY YU ANAI

役者

橋大五郎



TACHIBANA DAIGORO
ACTOR OF
TRADITIONAL POPULAR THEATRE

おかえりって言ってくれる地元日田の

お手伝いが少しでもできたら嬉しい。

■日田で過ごしていた少年時代

「僕は産まれた時から劇団と共に過ごしてきました。うちの劇団は僕が小学校に上がる前までは、天ヶ瀬温泉のサンビレッジの常置の劇団だったのでそこが最初の舞台だったんじゃないかなと思います。そんな理由もあって五馬くんには毎年帰って公演をさせていただいています。小学校に上がった頃から劇団がいろんな町を回るようになり、僕は親と離れ実家で祖母と暮らしていました。現総座長の父で僕の祖父にあたる先代が、学校にはちゃんと行かせたいと言っていたからでした。それでも学校が終わると日舞のお稽古に行き、帰りに近くの三久ラーメンで焼きそばを食べて帰るのが日課でもあり楽しみでもありました。放課後に友達と遊んだ記憶は少ないですし、とにかく母親と一緒にいられないのが寂しかったことを覚えています。どうしても母たちと一緒に居たかった僕は3年生から劇団について回るようになりました。どの学校に行っても生活は同じ。3限目で早退し、お昼の舞台には立っていました。低学年の頃は舞台に立つのも楽しかったのですが、高学年になるとよく母親や祖母になぜこんな仕事をしなくてはいけないのかと桶突いたこともあります。野球が好きで野球選手になりたいという夢を持ったこともあったし、とにかく舞台に立つのが嫌な時期でした。それでもこれが僕の仕事なんだと自覚した瞬間があります。小学校6年生の時に嫌々ながらも練習して踊った藤娘。その時のお客さんの反応と拍手。達成感を感じました。」

■映画の経験と座長としての今

「大きな経験といえはやはり映画『座頭市』への出演です。浅草の大勝館という劇場のママが監督の北野武さんに僕を紹介してくれました。ある日の公演後、僕のお芝居をわざわざ見に来ていただけということで、武



さん一人の前でお芝居をしました。その後、急遽台本を書き直していただいたと聞いています。何もかも初めての経験でしたし、映像のお仕事をする事によって自分達のやっている大衆演劇を見詰め直すことができ、そこで得たことの多くを劇団に持ち帰ってることができました。僕が座長に就任したのは7年前。普通だったら1年くらい前に余裕をもって言い渡されることなんだと思うのですが、現在の総座長から気まぐれのように座長を言い渡され(笑)、びっくりしたのを覚えています。立場的に周りの目も違ってきますし、社会人としての自覚、そして教える側に立ったことで責任感も出てきました。大衆演劇は歌舞伎とは違いルールが厳しくない分、どんどん新しいことを取り入れていきたいと思っています。まだ馴染みのない若い世代の方々にも今後もっと足を運んでいただけたら嬉しいです。」

■地元日田への思いとメッセージ

「毎年行わせていただいている天瀬での公演は橋劇団の原点でもあります。今年は九州北部豪雨もあり、元々予定していたパトリシア日田での公演をチャリティー公演とさせていただきます。いただいたのは、関西のお客さんが日田の被害のニュースを知り、お見舞いをくださったことがきっかけでした。僕らの目標は日々の舞台を成功させること。元々旅行者の根本は町おこしだと思うんです。そういう意味でも日田の活性化のお手伝いが少しでもできたらいいなと思っています。僕が今芝居を続けていられるのもやっぱり好きだから。若い方々へ言えるのは何か好きなことを見つけたら、簡単に投げ出したりせずに続けてみて欲しいです。その先にきっと何かを見い出せると思うんです。そして日田の外にいたとしても、地元への思いを大切にしたいと思っています。」

blogs.yahoo.co.jp/daifanblog

Hina Style 17